（様式３）

外国人児童生徒等教育アドバイザー派遣結果報告書

都道府県名	大阪府	市町村名		大学名	
派遣日	令和４年９月９日（金曜日）　13：30～17：00 打合せ　13：30～14：00 講義等　14：00～17：00				
実施方法	派遣　／　遠隔				
派遣場所	施設：大阪府教育センター 住所：〒558-0011 大阪市住吉区苅田４丁目 13-23				
アドバイザー氏名	櫻井　千穂				
相談者	・市町村立小中学校日本語指導対応教員 ・市町村教育委員会日本語指導担当指導主事 ・大阪府オンライン日本語指導員				
相談内容	・日本語指導が必要な児童生徒の日本語習得状況の見取りにあたって、DLA 及び「個別の指導計画」作成のための学習目標例をどのように活用すればよいか。 ・当該児童生徒の日本語状況を的確に把握し、日本語指導が必要な児童生徒への効果的な指導をどのようにすればよいか。 ・DLA ステージが低い児童生徒の日本語能力を向上させるタスクベースの日本語指導をどのように考えていけばよいか。				
派遣者からの指導助言内容	・言語の習得・アイデンティティの形成は、生育環境・家庭環境要因、学習環境要因、社会文化的要因、学習者要因が複雑に絡み合っており、子どもの実態把握が非常に重要である。そこで、日本語の力を見取るために DLA＜話す＞を活用し、CLD 児童生徒が頭の中で、何を考え、感じているのか、持っているすべての言葉を使って、何ができるのかを捉えることが必要である。 ・言語能力の測定法（DLA）は、単に CLD 児童生徒が「できる」「できない」といった結果だけではなく、対話を通して子どもの最大限の力を引き出すと同時に、子どもの能力を伸ばす機会にもなる測定法である。また、子どもが課題に取り組むプロセス・言語使用実態を可視化でき、紙筆テストと異なり、一番早く伸びる会話力を使って潜在的な力を引き出すものである。DLA を行った子どもと、その時間がすてきな会話の時間になるようにする必要がある。（具体的には、子どもの答えるペースを見ながら、アセッサーが自分でテンポを調整したり、できることを聞いたりして子どもに自信を付けさせていく。また、回答に「分からない」が続いた時は、子どもが分かるものを答えさせてもよい等。） ・DLA 実施時、質問を聞き直すときは、言葉をつけ加えないこと。子どもに理解させようと聞いた内容を詳しく言い直したり、別の言葉で言いかえたりすると、子どもはさらに分からなくなり、自信を無くして答えられなくなってしまうことがある。そのことをアセッサーが常に意識する必要がある。 ・「言葉は教えるものではなくて、育てるもの。」渡日年数が浅い児童生徒に対して簡単な漢字の練習や絵カード等を使って、くり返し学習を行うだけのケースも多く見られる。子どもたちの日本語能力を伸ばす一番の方法は、子どもたちの力を認め、				

（様式３）

	対話を通して子どもたちの興味関心のある事から話すような工夫が必要である。 ・タスクベースの日本語指導は、認知発達レベルにあった活動をすべきである。日本語力だけではなく、年齢等に応じて、タスクの内容を調整する必要がある。そして、子どもたちがたくさん話をし、「楽しかった」「またやりたい」と思えるようなタスク（例えば、高学年のタスクで、みんなが楽しく過ごせる学校をつくろうなど）を考えていく必要がある。 ・日本語指導が必要な児童生徒は、日本語が「できない」子どもではなく、「２つ以上の言葉と文化を持つ」子どもである。子どもたちが社会で生きていくために学ぶ機会や可能性を摘まないよう、常に意識して指導する必要がある。
相談後の方針の変化、今後の取組方針等	【参加者アンケートより】 ・DLA＜話す＞を通して、見取りがいかに重要なのか理解することができた。「活動の認知レベルを下げないで、日本語のレベルを下げる」「自信を持たせる活動をさせる」指導を考えていきたい。 ・子どもがもっと話したいと思うことが大切で、それがないと力が伸びないのだと感じた。テキストで学ぶことも必要だが、それだけの指導では日本語の力は伸びにくく、タスクを達成したり、身の周りの興味、関心に合わせたりすることが大切ということを学んだ。今回の研修で、実際に DLA を実施している様子と子どもの見取りについて解説をいただくことができ、具体的なイメージを持つことができた。 ・グループワークを通して、１つのタスクからたくさんのアイデアが出てくるなど、学びが多くあった。子どもの日本語能力を的確に把握し、今後より一層楽しい取組みを考えていきたい。また、その取組みを通常の学級でも共有していきたい。 ・子どもたちが、「伝えたい！」と思える学びの場をつくる工夫が必要だと感じた。「言葉を育てる」ということを意識したいと思う。覚えさせるのではなく、子ども自身が使いたいと思えるような学習を展開したい。子どもたちに「日本語を教えなければならない」と気負っていたところもあるので、その子の背景などにも寄り添い、一人ひとりに合ったカリキュラムを考えていきたい。